道徳科学習指導案

授業者　上田　泰稚

「雨のバスていりゅう所で」
～ 出来ない心を見つめ、よりよく生きる心について自分の言葉で語り合う～

１．学年・組　　４年西組

２．目指す子どもの姿

道徳教育の目標が示す「自立した人間として他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性」の自立と共生の方向はウェルビーイングであり、道徳授業はそのための見えない心の根っことしての道徳性の基盤を確かなものにしていくものでなければならない。そのためには、教材の内容や教材の良さを生かしながら共によりよく生きるための基盤や土台となる道徳性を育む授業を行う必要がある。

そこで、道徳科の授業を通して、よりよく生きたいという心が自覚的になり、自分自身の豊かな生き方に必要な心を模索し続けようとする姿を目指す。教材から自分自身の心を見つめ、よりよく生きるための心について自分の言葉で語り合い、言葉を紡ぎ合いながら豊かな生き方を考え抜こうとする姿を目指したい。

しかし、9 歳以降の児童は「発達の個人差が大きくみられる」「自尊感情の低下による劣等感を持ちやすくなる時期」と文部科学省が示している通り、他者のことが気になり、子どもたちにとって自分の思いや経験を自分の言葉で語ることが難しくなる時期である。本学級の子どもたちも、4 月当初、学習内容について知識や理解に関することには積極的に発言はするが、心理面や情緒面を問われた時は周りの目が気になるのか消極的になる様子がしばしば見られた。

また、道徳科の授業では一部の子どもたちで授業が進んでいく様子や活発に発言していてもどこか綺麗な言葉が飛び交い、道徳的価値が自覚されず上滑りしているような授業になってしまうことが良く起こる。教師が子どもたちによりよく生きるためには「人としてこうあるべき」ということを知ってほしいという願いから、教師発信の問いで誘導する誘導型授業になってしまいがちだからである。結果、子どもたちはその問いに対し「人としてこうあるべきことは何か」という「綺麗な正解」を見つけようとしてしまい、借り物の言葉が行き交う授業になってしまう。

これらのことから、子どもたちが教材から自分自身の心を見つめ、豊かな生き方を追求しようとなるためには、教師から与えられた問いを解決しながら理解するのではなく、子ども自身が道徳的価値の良さを再認識し、よりよく生きたいという感情を刺激する必要がある。子どもたちにとって、教材での学びが自己の心を映し出す鏡となった時、内省が伴う人生の疑似体験的な学びとなるだろう。道徳の授業を通して「自分の生き方を自分の言葉で堂々と語ることができる」姿を目指したい。

３．本単元における学びを紡いでいく子供の姿

本時における学びを紡いでいく姿とは、よりよく生きたいという心が自覚的になり、自分自身の豊かな生き方に必要な心を模索し続けようとする姿である。

上記の目指す子どもの姿を育むために、子どもたちは本時で以下のような過程が重要となる。

・中心人物の弱き心についてとその弱き心に共感できるか、できないかを考える。
・弱き心を受け止めて、よりよく生きるために自分は何を大切にしたいかを考える。

道徳の多くの教材に中心人物が弱い心（無知、甘さ、不安など）からよりよく生きるために大切なことを見つめる様子が描かれている。人には良い情報と悪い情報があった場合、ネガティビティ・バイアスが働き、悪い情報に目を向け、詳しく処理しやすいという特徴がある。本時でも教材を見つめることで、主人公よし子の公徳心の欠如に自然と目を向け、「どうしてそのようなことをしてしまったのか。」と問いを抱くはずである。中心人物の行動の裏にある弱い心を想像し、共感できるかを考えることで自分自身の経験や体験を振り返り、自分の言葉で語ることで道徳的事象を自分ごととして捉えていく。共感できるか、できないか自分自身の言葉で語り合うことで子どもたち自身のよりよく生きたいという感情が刺激され、よく生きるための心を考える必要感が高まっていく。そして、中心人物の行動から豊かに生きるために自分は何を大切にしたいかを考え抜き、自分自身の生き方へと繋げていく。このような姿が、本時における「学びを紡いでいく子供の姿」である。

４．本単元で扱う材

（教材について）

本時で扱う教材は「雨のバス停留所」である。本教材では、雨の日、主人公のよし子が、たばこ屋さんの軒下で順番に並びながら雨宿りしている人たちを抜かしてバスに乗ろうとするが、見かねた母に連れ戻されるという道徳的事象が描かれている。

教材に触れた子どもたちの多くは、雨宿りしている人を差し置いて、自分が一番にバスに乗ろうとするよし子の行動と自分の行動が良くないことに気付いていない姿に違和感を抱くことが想像される。しかし、並んでいる人たちが雨宿りをしているため本来のバス停留所に並んでおらず、雨の日にはたばこ屋の軒下に並ぶというきまりがあるわけでもない中で、よし子がとった行動は何がいけないのかという疑問を抱くだろう。ここで、「みんなが並んでいるならば、自分も並んだ方が良いのか。」という問いが生まれ、「規則の尊重」という価値の一面の「みんな同じ思いや願いがあり、お互いが気持ちよく過ごすために守るべきことがある」という『公徳心』が材として立ち上がる。

しかし、この教材は、よし子が「公徳心」という道徳性に気付き、心新たに行動する姿は描かれていない。よし子の行動は、「決められたルールはないから…」「誰もバス停留所で並んでいないので順番抜かしではない」という規則やきまりに対する誤謬が引き起こしたものであり、雨宿りをしていながら待っている人の気持ちまで目が向かない。きまりやルールがない中での出来事だからこそ、規則やルールを守ることの本質である「公徳心」を考える必要性のある教材となっている。

このような教材の特性から、よし子本人の心情だけでなく、いつも優しいお母さんが静かに怒る思いや順番に並んでいるお客さんの思いを考える多角的な視点が必要となる教材と言える。

（材について）

本時では、【みんながお互いに気持ちよく過ごすために守るべき心】という道徳的価値である「公徳心」が材となると考える。

学習指導要領では、規則の尊重の価値項目の解説の中に「社会集団を維持発展する上で，社会生活の中において守るべき道徳としての公徳を進んで大切にする態度にまで広げていく必要がある」と示されている。つまり、公徳心は自分も集団や社会の中で生活する一人であることを理解し、公共の場ではみんなが気持ちよく生活できるようにするという道徳的価値であるといえる。

子どもたちは、よし子の行動が良くないとは感じつつも、きまりを破ったわけではないことから、よし子は本当に悪いと言えるのかという違和感を抱き始めるだろう。また、よし子が順番抜かしをした時の心情を考えた時、「悪気がなかったのではないか」や「並んでいるとは思わなかったのではないか」など、よし子の心情に共感する子もいるはずである。よし子が順番を抜かした時の心情は、自分の経験や体験を想起した多様な価値観から自分の言葉で語り合うきっかけとなり、道徳的事象を自分事として捉え始める。

しかし、いつも優しい母が静かに怒る姿は、よし子の行動にはよりよく生きるための心が伴っていなかったことに気付かせることだろう。その母の怒りの真意は、子どもたちにとって考えたい問いとなると考える。

子どもたちは、母の怒りからよし子の至らなさについて考えた時、それぞれが見つめる材は多様化する。例えば、「周りの人のことを考えて行動した方が良い」や、「自分の行動が良いか悪いか考え、行動すべきだ。」「並んでいる人に並んでいるか聞いた方がよかったのではないか。」などの考えが生まれると予想する。その多様化した材は、道徳的価値である公徳心という材にすべて内包されていると考える。【みんなが互いに気持ちよく過ごすための心】は、集団や社会の中でよりよく生きるためのことであり、自分を律する「善悪の判断、自律、自由と責任」、相手を思いやる「親切・思いやり」、誰に対しても真心を持って接する「礼儀」など様々な道徳的価値で成り立っているからである。

このように、自分自身のことしか考えることができなかったよし子の至らなさを通して、母の思いを見つめた時、【みんながお互いに気持ちよく過ごすために守るべき心】という多様な価値の持つ「公徳心」を自分自身のよりよく生きるために必要なこととして考えるはずである。「公徳心」という材が、自分の生き方に生かせる何かとして子どもたちを学びに誘い、自分の言葉で語り合い、子ども同士で言葉が紡ぎ合いながら新しい価値の発見を創る学びになると考えた。

５．単元計画

○同一内容項目のオーバーラップユニット単元の構成について

次	時	学　習　内　容	子供の姿 予想される子供の姿
1	1	バーベキュー【規則の尊重】	自分の都合や思いで、きまりやルールを守らないと、いろいろな人たちに迷惑をかけてしまうんだな。
	2	バーベキュー＋日常の出来事（学級での出来事）＋雨のバスていりゅう所で 【規則の尊重】	相手と自分がよりよく過ごすためにきまりやルールを守ることは大切だけど、上手くできないのはどうしてだろう。きまりやルールがない時には、どのような行動が良いのだろう。
	3 本 時	雨のバスていりゅう所で 【規則の尊重＋α（親切・思いやり、節度・節制、自主・自律など）】	みんな願いや思いを持っているから、みんながよりよく過ごすために守るべきことは何か考えることが大切だな。

本教材を扱うにあたり、同一の内容項目について、3 週間（各週 1 時間）続けて授業を行い、価値に対する理解と子どもたちの道徳性を深めていく学習過程を設定する。

今回の単元では、同じ内容項目の教材を続けて 2 時間行うのではなく、間となる 2 時間目に前時の学習した道徳的価値を基に、自己を見つめ、次の道徳的事象の問いを立ち上げるオーバーラップの時間を設定する。

この授業では、1 時間目に学習した内容項目を振り返りながら、身の回りで起こった道徳的事象について考え、よりよく生きるために大切だと考えることを実現できているか見つめ直す。子どもたちは、道徳的価値の良さや大切さはわかっていながらも実際には、できていないことやできない場面があることに気付き、実現することの難しさを感じることだろう。それは、子どもたちが道徳的価値を本当の自分事として考え始めた姿であり、道徳的価値について自覚的に捉えている証といえる。そして、子どもたちは、なぜ上手くいかないのか、自分が本当に大切にすべきことは何なのかというより自覚的な問いを持ち始めるはずである。

子どもたちが自覚的な問いを持ち始めた授業の終盤で、第 1 時で学習した教材とは違うきまりや規則がない中での出来事である「雨のバスていりゅう所」に触れさせる。自覚的な問いを持ち始めているところで、教材の気になるところはどこかと問えば、子どもたちの中で生まれていた問いが教材への問いと重なって立ち上がってくるはずである。

このようなユニット単元を組むことによって、子どもたちは道徳的価値を自分たちの生き方と繋げて捉えることができると考える。そして、1 時間では難しいとされていた自己を見つめながら、自分にとってよりよく生きるために大切なことを見つけることができるはずである。また、第二時にオーバーラップの時間を設定することによって、教材に対して子どもたちが抱いた問いを可視化することができ、子どもたちの問いから第 3 時の学びを作ることができる。そして、単元で育みたい道徳的価値に加え、道徳教材の持つ多様な価値にも目を向けることができるのではないかと考える。

６．子供が学びを紡いでいく過程〈他者との関わりによる材の変容に着目して〉

これまでの学習では、道徳的事象を分析的に考え話し合うのではなく、中心人物の弱い心に目を向け、共感できるかできないかを自分の言葉で語り合い、その上でよりよく生きるための道徳的価値について学級で見つける学習を行ってきた。子供たちは中心人物の弱い心に共感できるか、できないかという立場を決め話し合うことで、自分の経験や体験をもとに教材の道徳的事象を自分ごととして考え、自分の言葉で語るようになってきた。また、他者の言葉に対しても、同感や共感、疑問などを示しながら聞く姿が見られるようになってきている。

よって、本時では、全員が道徳的事象を考える舞台に上がる場面、互いの意見を聞き合いたくなる場面、語り合いながら自分たちがよりよく生きるための道徳的価値を発見する場面の 3 つの場面を設定する。その中で子ども同士のかかわりが生まれ、材が変容していくものと捉える。

①問いの形成（全員が材の入り口に立つ）：教材の「気になるところ」を見つける。
②問いの自覚化（材への気づき）：中心人物の弱い心に対して「共感できるか」考える。
③道徳的価値の発見：弱い心を受け止め、よりよく生きるための道徳性の追究

①問いの形成（全員が材の入り口に立つ）について

子どもたちが学びを紡いでいくためには、学級のすべての子どもたちが道徳的事象について考える舞台に上がらなければならない。そこで「気になるところはどこか？」という子どもたちの抱く関心に寄り添う発問から授業に入っていく。

前時の授業で、自分たちの身の回りの道徳的事象について考え、きまりを守ることは大切だとわかっていながらも難しいと感じている子どもたちは、よし子の行動や母が怒る理由などに共感や違和感を抱き、気になると答えることが予想される。なかでも、雨のバス停留所での出来事でよし子がきまりを破ったわけではないところに注目するはずである。よし子がしたことは悪いことと考える児童もいれば、よし子はきまりを破ったわけではないから本当に悪いと言えるのかと対立した考えを持つ子どもたちやよし子が先にバスに乗ろうとした気持ちが気になる子もいるだろう。それぞれの気になるところを出し合い、考え方の違いに触れた時、子どもたちはその違いに心が動き「きまりを破ったわけではないよし子は、本当に悪いのだろうか。」「母は、きまりを破ったわけではないよし子の何に怒っているのか。」などの材の入り口となる教材の本質的な問いを持つと考える。子どもたちのこのような問いを持ち始めた姿は、材の入り口に立ったといえるだろう。

②問いの自覚化（材への気づき）について

人は誰しも、良い人間でありたいと思っている。しかし、人の持つ弱い心に邪魔をされ、葛藤し、失敗する。そうして自分の心と向き合っていく。そのような経験はよりよい良く生きるための心を育むための糧となる。

前時の授業で、自分たちの身の周りの道徳的事象について考え、どうして自分たちはきまりを守れない時があるのか考えた子どもたちは、よし子が先にバスに乗ろうとした心情について自分たちと重ねながら考える。よし子が抱いた心情を考えた上で、その心について共感できるか考えた時、自分の経験や体験から「ちゃんとその場所にならんでいなかったから先に行ったことがある。」「別に決まりはないわけだし、自分がやらなくてもってなる。」「ならんでないならラッキー。」などと共感を示す子もいれば、「みんながやっていることを考えたらおかしい。」「他の人の気持ちを考えたらすべきではない。」などと共感できない立場を示す子がいると考える。子どもたち同士で意見を交わす中で、前時の学習を想起し、自分たちも上手くできないこともあり、ましてや決まりがない出来事でのよし子の行動は仕方ないのではないかという考えと、それでも他の人の思いや社会全体のことを考えるとそれはよりよく生きるために大切なことではないかという考えでズレが生まれる。

このような考えのズレは、上手くできない自分と良い人間でありたい自分の対立であり、その対立について考える姿は、問いを自覚化した姿であるいえる。そして、子どもたちはそのズレを解決するために「決まりを破ったわけではないよし子に母が怒っている理由は何なのか。」という材へと向かう問いに気付き始めるだろう。

③道徳的価値の発見（多様な材の受容と共通材による発見）について

道徳的事象について、自分の経験や体験も合わせてどう思うか心を見つめた子どもたちにとって、よし子の行為がいつも優しい母を静かに怒らせた理由は、考えたい材となる。その問いについて考えた時、様々な視点で、多様な考えが出てくるはずである。「周りの人たちも同じように早く乗りたいと思っていたはずなのに、それを考えず抜かしたことに怒っているのではないか」

「気付いていなかったとしても悪いと思っていないことに怒っているではないか」のように他者に対する気配りについて、「みんなが並んでいる姿をみて、良いか悪いか考えていないことに怒っているのではないか。」「何も悪いと思わず、ずけずけと乗ろうとする失礼さに怒っているのではないか。」という善悪の判断や礼儀について考える子もいるはずである。多様な考えを出し合う中でどの考えも大切なことであると気付き始めた時、多様な考えがよりよく生きるために大切なことかどうか考えて聞く姿が表れるだろう。その姿は、子どもたちの中で材が共通材となった姿といえる。前時で「きまりを守らなければいけないけど難しい」と感じていた子どもたちは、共通材によって、きまりを守ることが大切なのではなく、みんなが気持ちよく過ごすために大切なことがあり、きまりはその一つである。」と気付くことだろう。

共通材を通して、みんながよりよく生きるために大切なことは何かを発見し、自分は何を大切にできるかを考え抜こうとする姿は、道徳性を追求する姿といえるだろう。

７．本時の目標、授業を通して期待する本時における子供の変容

●本時の目標

よし子の行動や心情からみんなが気持ちよく過ごすために必要なことについて考え、身近な人だけでなく、周りの人や集団に対しても大切にしようとする心情を育てる。

●授業を通して期待する本時における子供の変容

授業前の子供の様子と考え方
人に嫌な気持ちをさせないために、きまりは守るべき。だけど、自分たちにもできないときがあるな。

⇒

授業を通して深めたい子供の考え方
みんな自分たちと同じように願いや思いがあるから、みんなが気持ちよく過ごすために大切なことがあるな。だから、自分は○○を大切にしたいな。

９．本時の展開

１．前時で読んだ「雨のバスていりゅう所」の内容や出来事を確かめる。

２．前時の自分が考えた「雨のバスていりゅう場で」の気になるところを出し合う。

- 母はどうして怒ったのだろう。
- 母が怒ったのは、よっぽど良くないことだから。
- きまりがあるわけでもない。
- よし子は、本当に悪いことをしたのかな。

３．中心人物であるよし子はなぜ順番抜かしをしてしまったのか心情を考える。

- ていりゅう所にならんでいないならいっちゃおう。
- みんな雨宿りしてるから１番になれる、ラッキー。
- すわりたい。

他者との関わりと材の変容

①材の入り口に立つ

気になるところを考えることで、「よし子」「よし子の行動」「母の怒り」などに注目し始める。よし子の行動のどこがいけないのか、よし子はどうして順番を抜かしてしまったのか、母はよし子のどこに怒っているのかなど、様々な問いを持ち始める。この様々な問いを持ち始めた子どもたちは、材である多様な道徳的価値を持ち合わせた「公徳心」の入り口に立ったと言える。

４．中心人物のよし子の心情について、共感できるか・できないかを考え自分の言葉で伝え合う。

＜わかる＞

・きまりがあるわけではないから、まあいいかなと思ったことある。
・みんながやっているだけ、こうしなきゃいけないってわけではない
・よし子は知らないだけで、悪気はなかったんじゃないかな。

＜わからない＞

・私は、みんなが並んでいるのにそんなことしない。
・きまりがなくても、みんながやっていることと違うことをするのは…
・どんな理由でも順番抜かしは良くない

５．　よし子の行動は、どうして良くなかったのか考える。

・自分のことしか考えていない。
・周りの人のことを考えていない。
・きまりがなくてもみんながしていることには意味がある。

６．ルールやきまりがない時でも大切なことは何か考える。

・周りの人やみんなのことを考えたほうがいい
・他の人にだって、同じ思いがある。
・周りの人のことを考えて、良いか悪いかを考える必要がある。

②材への気づき

　よし子の心情について、共感できるかできないかについて考えることで、自分の経験や体験から自分の言葉で考えを語りだす。よし子の弱い心は誰しもが持つこともあると受け入れつつもよりよく生きるためには、材である「公徳心」が必要であることを感じ始める。

③多様な材の受容と発見

　よし子の至らなさから、よりよく生きるために大切なことは何か考えた時、子どもたちの材は多様化する。その多様化する材が、人や自分たちがよりよく社会を生きるためには大切なことなのかどうか、見つめることで、共通材となっていく。その共通材は、子どもたちに多様な価値の良さや大切さを発見させ、その多様な価値こそが「公徳心」において大切であることに気付いていく。

見取り：

・中心人物よし子の弱い心について考えて自分の言葉で語り合っているか。
・周りの人たちにもそれぞれ思いや願いがあることに気付いているか。
・みんなが気持ちよく過ごすために自分が必要だと思う道徳的価値を見つけ

１０．参考文献

青木孝頼,1995,「道徳授業の基本構想」
島　恒生,2020,「納得と発見のある道徳科　『深い学び』を作る内容項目のポイント」
文部科学省　教育課程部会　教育課程企画特別部会,2026,「【資料１】次期学習指導要領に向けた審議まとめ（案）」
田沼茂紀,2026,「複数時間の道徳科授業づくり」
高宮正貴,杉本遼,2022「道徳的判断力を育む授業づくり　多面的・多角的な教材の読み方と発問」

１１．座席表

1	2		9	10	20	21			
3	4		11	12	22	23		31	32
5	6		13	14	24	25		33	34
7	8		15	16	26	27			
		17	18	19	28	29	30		